

## アジールとしての翻訳 ——ヘルダーリン「ピンダロス断片」とハイデガー——

西山達也

ハイデガーとヘルダーリン、両者の関係をハイデガー自身が設定したような思索と詩作の対話として把握しようとするとき、その把握の手前にとどまり、ともすると取りこぼされてしまうのが翻訳の問題である。翻訳の問題とは、突き詰めて言えば「翻訳者の使命」が何であるかをめぐる問いであるとするれば、ハイデガーにとって翻訳者の使命とはいかなるものだったのだろうか。このことを考えるときに一つの手がかりとなるのが、ハイデガーが翻訳者としてのヘルダーリンといかに対決したかである。そもそも、ハイデガーは翻訳者ヘルダーリンと、権利上、対決しえたのだろうか。詩人ヘルダーリンのうちに、詩人と思索者という双数的な対決において捕捉不可能な翻訳者ヘルダーリンが住まっていたとしたらどうだろうか。

以上の問いを念頭に置きつつ、本発表は、ヘルダーリンが遂行したギリシア語テキストの翻訳作業のなかからその最終到達点とも呼ぶべき「ピンダロス断片 (Pindarfragmente)」を選び、この翻訳作業に対してハイデガーがどのように対峙したのかを検討したい。

### 1. ピンダロス断片

「ピンダロス断片」とは、ヘルダーリンによる翻訳作業のうち、ピンダロスの断片群から9つの断片を翻訳・注解したものをいう（これとは別にヘルダーリンはピンダロスの頌歌の翻訳も行っている）。9つの断片は、その数、主題、配置、エコノミーの効いた注解等、詩人の精密な計算にもとづく構成を窺わせる要素が多く、研究者の間では単なる断片的習作という以上の評価が与えられている。この断片の翻訳・注解が作成された時期は、ソフォクレスの悲劇の翻訳・注解作業とほぼ同時、あるいは直後の時期（第二次ホンブルク期、1803-05年頃）と推定されており、成立年代においてもヘルダーリンによる一連の翻訳作業の最終到達点をなすものである。

このピンダロス断片について、ハイデガーはまとまった読解を行ってはいない。ここからヘルダーリンの翻訳作業に対するハイデガーの不感応を断ずるのは性急であろう。ハイデガーは、幾つかの重要な箇所、省略的な仕方ではあるがピンダロス断片を参照しているのである。講演「あたかも祭りの日に…」(1939-40年)における「至高者」断片への言及、また、最初にヘルダーリンが扱われた『ゲルマニア・ライン講義』(1934/35年)でも、「活力を与えるもの」という断片の全体が引用されている。ヘルダーリンについての未完

草稿（『ヘルダーリンに寄せて』GA80）のなかには、「ヘルダーリンのピンダロス断片翻訳に寄せて」と題された覚書（1944年）もあり、ここでは次のような言葉を読むことができる。

「ヘルダーリンがそれ以前に語ったすべてとは比較にならぬものあり。この僅かなものから発して彼の作品全体を見ること。」

ハイデガーにとってピンダロス断片の翻訳が、そしてそこに付された注解（「僅かな」言葉で書かれているがゆえに独特の難解さを持つ）が、いかなる意味で、いかなる尺度において「僅かなもの」として表象されうるのかを検討せねばならない。

## 2. 「アジール」

9つの断片翻訳・注解の中でも、とりわけ本発表では「アジール」と題された断片に着目する。現在のヘルダーリン全集（シュツットガルト版・フランクフルト版）では9断片中第8に配置されているが、20世紀初頭にピンダロス断片を再発見したノルベルト・フォン・ヘリングラートは「アジール」断片を冒頭に配置した。女神テミスとゼウスの婚礼を歌ったピンダロスの断片をテミスによる「アジール」の創出として読みかえるヘルダーリンの翻訳・注解は、ハイデガーの関心を惹起し、『イスター講義』（1942年）では、「滞在（Aufenthalt）」のモチーフとの関連において「アジール」断片への言及がなされている。ここでヘルダーリンとハイデガーにおける翻訳者の使命をめぐる交錯点が照らし出される。翻訳の法＝「媒介の法」によって、翻訳者はアジールを創出し、そこへの退避の権利を主張する。このようなアジールが、いかなる意味であらゆる人間たちの滞在となるのだろうか。不可侵な場としてのアジール（ギリシア語の *asulon* は、捕捉 *sulaô* を逃れるものの意である）、人間はそこに「滞在」することが可能なのだろうか。翻訳者の使命とは、アジールを創出し、そこへ退避することなのか。それとも、不可侵な場としてのアジールをそのものとして捕捉することなのだろうか。アジールとしての翻訳を問うことは、対話の手前にとどまりつつ対話を触発し続けるものの意味を問うことに通じる。